

「いゝえ、まああなたは何を仰有るのでせう……何も變つた事はありませんの……只……」

「それでも矢張りね？」

「つまりね、あなたが……あなたは女の方と色々澤山ロマンスを有つていらつしやる……そしてあなたは全體に女と云ふものに對して、よくない見方をしていらつしやるつて、さう云ふ噂があるんですの……」まるで冷い水の中へでも飛び込む様に、思ひ切つてリーザはかう言つた。

ミハイロフはじつと貪る様に彼女を見詰めた。と彼の鼻孔は擴がつて、目はきらきらと輝いた。

「所であなたは何うです……それが本當だと思ひますか？」と彼は訊いた。

「私は知りませんが……多分本當だらうと思ひますわ！」侮辱でもせられたものものに、きつと身を反らせ乍ら彼女はかう答へた。

「何が本當なんですか？」

「あなたが女をたゞ女として眺めてらつしやる、と云ふ事なんですか？」
若さと純潔さが彼女に力を與へた。彼女はひたと男の目を見詰めた。

「女としてとは何の事ですか？」彼女を暗い罪の觀念へ追ひやるかの様に、ミハイロフは狡猾さうにかう訊いた。

「だつて、あなた分つていらしつやるんですもの……」自分が男の前で裸になつて行く様な氣がして、思はずかつと赤くなり乍ら、娘は極り悪さうにかう言つた。

彼はリーザを眺め乍ら奇妙な微笑を浮べた。リーザは此の微笑を見ると、自分も矢張り女であつて、圓々した肩や、美しい胸や、すらりとした強い足や、露はな若々しい、弾力に充ちた肉體を持つてゐる。そしてミハイロフは軽い薄色の着物一重の覺束ない隔てを透かして、此の肉體を眺めてゐるのだと云ふ事を、痛切に直感したのであつた。

「ちや一體その他に何を女の中に見たらいいのですか？」とミハイロフは大膽にかう訊いた。

「何をですつて？一體女は人間でないものでせうか？一體女の持つてゐる物は只あの……」興奮した憤慨の調子で娘は言葉を返した。

「何も人間なんて事に關係は無いちやありませんか？」依然として斷乎たる聲でミハイロフは答へた。「一體女を女として愛する事が、その女に對する尊敬を缺く事になるでせうか？……それを侮辱だと云ふのは、餘り女性フエミナリタイを輕蔑した話ですよ！」

「いえ、さう云ふ譯ぢやありませんが……」とリーザは間誤つき乍ら、「併しあなたは餘り一方に偏した見方をしていらつしやいますわ……」

彼女は男が自分を後めたい爭論へ引き込んで、何か自分の目的を達しようとしてゐるのを感じたけれど、巧く會話を打ち切つて、心を興奮させたり威嚇したりする様な此の話題を回避する事も出来なかつたし、又さうする丈の腕も無かつたのである。

「それは第一女自身に依つて決せられる問題なのですよ」とミハイロフは反駁した。

「僕がさう云ふ風な見方をした婦人は、それ以外の見方を要求する資格が無かつたのです……女は何時でも自分の好きな態度を、他人から得る事が出来るんですよ……併し僕一箇に關して言へば、僕は女に對して、只女でなければ得られないものを求めて居ます。若し僕に取つて人間が必要だつたら、その時は誰の所へでも出掛けます。併し多分男の所へ行くでせうよ。何故と言つて、要するに現代に於ては男の方が、未だ矢張り女よりも利口で、發達の度が進んでゐますからねえ。何の爲めに女を掴まへて藝術だとか政治だとか、それに類した事を談じる必要がありますか？……さう云ふ話の爲めには、女より以上の答を與へて呉れる畫家なり、文士なり、學者なりを見付け出す事が出来ますよ……女に對しては僕は愛撫と、美と、歡樂を求めます……僕が女を愛するのは其の女性フエミナリタイの爲めです、美の爲めです、その肉體の爲めです……」

彼は奇妙な引き入れる様な力を以て話した。そして彼の口から出る女と云ふ言葉は、

熱烈な罪深い叫びの様に響いた。

彼の熱い呼吸は娘の頬を這つた。彼女は興奮した様な叫びの爲めにふらくと眩暈がして、薫の高い息苦しい霧で全身を包まれる様な気がした。

「それは大變不可ない事ですわ」無邪氣な處女の純潔性の最後の反抗として、彼女はやつとかう言つて、嚴つい清淨な目付で彼を見詰めた。

「何が不可ないので！」とミハイロフは挑む様に抗辯した。「すべての女は(あなたもその中の一人ですが)愛するが爲めに生れて來たのです……それは自然の法則で、純潔な美しい歡樂です。それを愚劣で卑俗な人間が何か汚い物の様に扱つてゐるのです。追々にはあなたは何でも好きな事をしていゝです……科學でも藝術でも何でも勝手なものに従事したらいゝでせう……併し今あなたは若くて健康で美しい婦人ですから、戀をしなければなりません……あなたは何れ誰かに戀し、誰かを愛撫し……誰かに身を任されるでせう。で僕はその誰かが、僕自身である様にと望む権利もあれば、それ

を追求する権利もある譯です！」

彼は何時しか目立たぬ様に直接リーザの事を話してゐたので、リーザも直ぐにはそれと気が付かなかつた。けれどふとそれを曉つた時、彼女はさつと顔を眞赤にして、薄色の房々した髪を頂いた頭を垂れて了つた。その様子はまるで途方に暮れて、呆氣に取られた様な風付であつた。ミハイロフは彼女が我れに返つて腹を立て、腹立紛れに越える事の出來ない冷い溝を作る暇の無い様に、急いで言葉を次いだ。

「例へば今此の瞬間に、僕はあなたと女の事などで議論し度いなどは少しも思ひません、只あなたを抱きしめて接吻し度い丈です！」

リーザは憎えた様に一度後へたじろいた。濃い紅の色は彼女の兩頬ばかりでなく、輕い着物で蔽はれてゐない丈夫さうな、恰好のよい頸筋までさつと染めて了つた。ミハイロフは少し焦燥り過ぎた、これでは女が自分を離れて了ふかも知れないと感じた。

「あなた怒つたんですか？」一瞬間に聲を變へながら、侮辱された様にじつと外方そっぽを見詰めてゐる、彼女の目を覗き込む様に低く屈み込んで、彼は暖い優しい聲でかう訊いた。

「あなた怒つたんですか？……ぢや勘忍して下さい……僕はあなたを侮辱しようなんて氣は少しも無かつたんですから……可愛いリーザさん！」

リーザは突然少し可笑しくなつて來た。彼の聲が如何にも申譯の無い様な、憐みを乞ふ様な響を帯びてゐたのである。

「いゝえ」と彼女は心持を和らげてかう言つた。「だけど何だつてあなたはそんな事を仰有るんですの！」

「何だつてですつて？つまりそれが本當の事だからです！」力を籠めてミハイロフは答へた。

リーザは途方に暮れた様に肩を竦めた。

欠

欠

「まあいゝわ……」彼女は途方せん……だけでもう澤山ですわ……」

かう言つた。「私腹を立てなんか居やしませんか。是非そのお赦しを實際に證明して下さい！會つて下さるでせうね、え？」彼女の目を覗き込み乍ら、同時に哀願と權威を聲に響か、つゝ彼は言つた。

「併し又會へるでせうね？……だつてあなたは僕を赦して下さいのぢやありませんか。是非そのお赦しを實際に證明して下さい！會つて下さるでせうね、え？」彼女の目を覗き込み乍ら、同時に哀願と權威を聲に響か、つゝ彼は言つた。

「えゝ、えゝ……私分りませんわ……いゝわ……」目の廻る様な心持を覚えながら、娘は苦惱者の様な聲でかう叫んだと思ふと、いきなり袴を掴んで一寸願をしやくつた儘、潜りの戸をがたんと言はせて、庭の中へ駆け込んで了つた。

ミハイロフは只一人取残された。彼は暫くの間じつと一つ所に立つて、奇妙に鋭い目で女の後を見送つてゐたが、やがてにたりと笑つて元來の方へ引返した。

彼は二人が又顔を合すと云ふ事も、彼女が自分を戀する様になると云ふ事も、ちやんと知つて居たのである。

以下中巻

アトルパシエ全集	
大正十一年 五月廿六日印刷	大正十一年 五月三十日發行
定價金貳圓八十錢也	發行所 東京市麹町區飯田町五丁目二三 合資會社 精藝社 電話九段一四五七 振替東京三九二七四
譯者 東京府澁谷區船木一〇一 米川正夫	發行所 東京市麹町區飯田町五丁目二三 合資會社 精藝社 電話九段一四五七 振替東京三九二七四
全集編譯者 東京府澁谷區船木一〇一 米川正夫	發行所 東京市麹町區飯田町五丁目二三 合資會社 精藝社 電話九段一四五七 振替東京三九二七四
發行所 東京市麹町區飯田町五丁目二三 合資會社 精藝社 電話九段一四五七 振替東京三九二七四	發行所 東京市麹町區飯田町五丁目二三 合資會社 精藝社 電話九段一四五七 振替東京三九二七四
印刷者 東京市麹町區飯田町五丁目二三 大須賀輝治	印刷者 東京市麹町區飯田町五丁目二三 大須賀輝治
宮本直一	宮本直一
第壹卷 最後の一線 上	第壹卷 最後の一線 上

新刊豫告 精藝社

○最後の線 中巻 米川正夫譯

アルツイバアシエフ全集 第二卷

六月發行

定價金貳圓八拾錢也

全文潑瀾たる辭句に満たされ内容益々佳境に入る

○生立の記 吉江孤雁 小林龍雄 共譯

アナトールフランス全集 第一卷

六月發行

定價金貳圓九拾錢也

一九二二年ノーベル賞受賞者の傑作



終